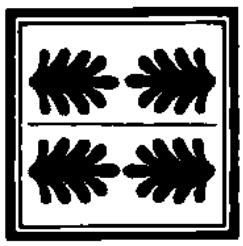
楊貴妃伝

井上 靖

講談社文庫



講談社文庫

楊貴妃伝

井上 靖

昭和47年9月15日第1刷発行

昭和49年3月8日第11刷発行

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話　東京（03)945-1111(大代表)

振替　東京　3930

デザイン　亀倉雄策

製　版　株式会社まゆら美研

印　刷　豊国オフセット株式会社

製　本　有限会社中沢製本

©Yasushi Inoue 1972

Printed in Japan

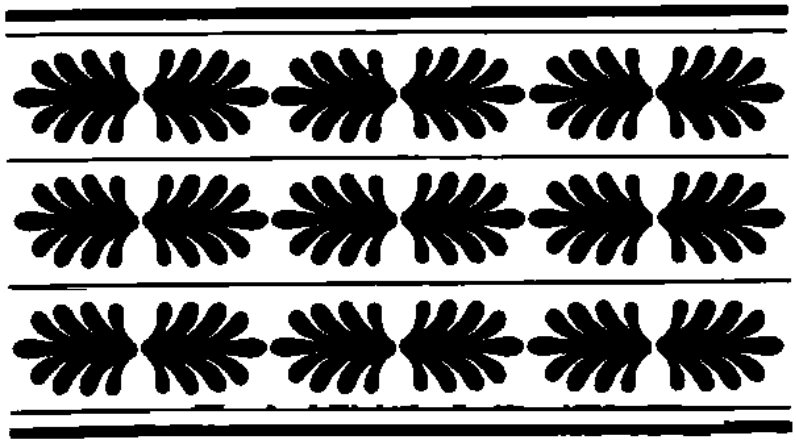
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

文庫

楊貴妃伝

井上 靖



講談社

目次

楊貴妃伝

語注　二八一

解説　石田幹之助　二九一

年譜　三〇四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

楊貴妃伝

第一章

開元二十八年（西紀七四〇年）十月、都長安より六里離れた驪山の温泉宮に行幸していた皇帝玄宗よりの使者が、長安の寿王邸に届いた。寿王妃楊玉環を温泉宮に伺候せしめよという玄宗からの命であった。

寿王瑁は玄宗が三千の後宮の中で最も熱愛した武恵妃との間にもうけた皇子であり、一時は皇太子に立てようとさえした人物であった。その寿王の妃である楊玉環に対して、玄宗からのお召しの声がかかったのである。玄宗からのお召しがいかなるものかは、寿王にも、当の楊玉環にもよく判っていた。

父玄宗の命を受け取った瞬間、寿王は愛妃楊玉環を自分が失わなければならぬことを知った。寿王は楊玉環を招ぶと、父帝からの命を伝え、よく考え、自分の望む道を選ぶようにと言った。そしてその即答を求めず、寿王は己が居室に退いた。

一刻ほどして妃の侍女が返答を持って寿王の許に赴いた。父帝からの御命令とあらば、それに背くことはできないであろう、そういう妃の答であった。寿王は顔色一つ変えず、そう望むなら、そのように為せと言った。寿王はこの瞬間、愛妃楊玉環を失うことに決って吻とした思いであった。若し妃が父帝の命に従うことを拒むなら、二人の持つべき運命は死以外の何ものでもなかったからである。苟くも父親が己が血を分けた子の妻を要求するということは、生易しい気持でできることではなかった。父玄宗も、それにはそれだけの心構えをした上のことであったに違いなかった。

寿王瑁の母武恵妃が薨じてから丁度三年経っていた。武恵妃は勿論妃であり、皇后ではなかったが、玄宗の糟糠の妻ともいうべき王皇后に子供がなかったので、その権勢は初めから王皇后を凌ぐものがあった。しかも開元十二年、王皇后が兄の罪に依って、皇后の地位を追われて庶民となり、間もなく失意の中に死するに到って、武恵妃の地位は確固たるものになったのである。玄宗には、現在皇太子に立てられている亨の母である楊氏や、美貌を以て知られた趙麗妃などの女性があったが、いずれも早く亡くなり、武恵妃ひとりが玄宗の寵をほしいままにし、皇后と同じ待遇を受け、一門は顕職に就いていた。武恵妃は自分が生んだ寿王を皇太子に立てるために、いろいろと策謀を廻らした。趙麗妃の生んだ皇太子瑛が廃されて死を賜わったのも、その讒言に依るものと一般には噂されていた。

武恵妃は開元二十五年十二月に薨じたが、若しもう少し生きていたら、寿王は皇太子の位に即いていたに違いなかった。廃太子の議が行われてから幾許もなくして武恵妃は歿し、ために寿王

の立太子のことも行われなかったのである。生前の母武恵妃の専横眼に余るものがあったので、それだけにいったん武恵妃が薨ずると、寿王の立場は頗る微妙なものになった。それまでは玄宗も寿王を愛していたが、併し、それは母武恵妃あってのことで、武恵妃が亡くなると、その愛情に後退を来してもさして異とするには当らなかった。玄宗は三千の後宮の誰にも子供を生ませることができた。子供はあくまでそれを生んだ母親のものであり、その部分であった。母武恵妃が死すると共に、その子供も亦死んだのであった。権力ある重臣が特にかばえば兎も角、武恵妃を母に持つ寿王の場合はそうしたことも考えられなかった。武恵妃が薨ずると共に、その子寿王もまた権力者が特に眼をかけねばならぬ皇子ではなくなったのである。玄宗皇帝もそう思った筈であり、子の寿王もまたそう思ったのである。そしてそうした玄宗の気持の最初の現れがこんどの事件であった。

母武恵妃に似た面輪を持った色白の若い皇子は、父王の無体な求めに対して一つの抗議をも為し得なかった。曾て他腹の皇子たちが蒙った悲運は、こんどはいつ自分を襲うか判らなかった。

楊玉環は玄宗からのお召しがあったことを知った瞬間、自分という一個の女の生涯がふいに大きな力で折り曲げられたのを感じた。玄宗は己が夫の父親としては考えられなかった。またそのような考えは、これまでも一度も持ったことはなかった。玄宗は大唐帝国の絶対の権力者であり、それに較べれば、夫寿王は今や極めて無力の王族の一人でしかなかった。

楊玉環は夫寿王から事の仔細を伝えられた時から、ずっと得体の知れぬ昂奮が自分を襲うに任せていた。寿王妃に冊立されたのは開元二十三年十二月のことであり、それから五年近い歳月が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

経っている。寿王妃となった時も、夢にも考えていなかった運命の到来に戸惑ったが、こんどの場合は、それとは同日には語れなかった。楊玉環は寿王のもとに侍女を派してから、あとは自失状態に陥って牀*上に身を横たえていた。好むと好まないとに拘らず、生きて行くためには玄宗の後宮にはいらなければならなかったのである。

楊玉環は玄宗からの使者を得た翌日、まだ薄暗いうちに長安の街を出て、驪山の温泉宮に向った。従者は騎馬の者を混えて三十名程であった。玉環はきのう玄宗からの使者のことを伝えられてから寿王と会っていなかった。寿王と別れの挨拶をしないで、寿王邸を出たのである。寿王もその方がよかったし、楊玉環もまたその方がよかった。寿王邸を出る時、玉環は自分が再びこの居館へ戻ることも、妃として寿王に見えることもないであろうと思った。玉環はこれまで妃として夫寿王に愛情を持っていたし、天下の二人の権力者玄宗と武恵妃の間にできた子供としての夫の地位に充分眩いものを感じていた。併し、今やいっさいのそうしたものとは無関係な立場に立たせられたのである。

玉環が自分が今まで思ってみたこともなかった新しい運命の中に置かれていることに、そしてその運命の持つ本当の意味に気付いたのは、驪山に向う輿の中に於てであった。自分がいま幸福に向って歩いているのか、反対に不幸に向って歩いているのか、玉環には判らなかった。判っていることは、ただ自分が容易ならぬものの方に招き寄せられつつあるということであった。そこへ近づいて行くことが、そうしなければならぬことが、自分にやって来た新しい運命であった。

何人も比肩することのできぬ大きな権力を持ち、その一言で何人の命をも断つことのできる殆ど信じられぬような人物が、そこでいま自分を待っているのである。

そしてそこでは三千の後宮が権力者を取り囲んでいる。唐の制度では権力者は等級をつけた女たちを抱えている。皇后の下に、貴妃、徳妃、淑妃、賢妃の四妃がある。その下には昭儀、昭容、昭媛、修儀、修容、修媛、充儀、充容、充媛の九嬪があり、更にその下には婕妤、美人、才人がおのおの九人ずつ、宝林、御女、采女が二十七人ずつ配されている。その他に多くの女官も居る筈である。玄宗の場合、多少この制度を改めてはいるが、併し、後宮三千の凄まじさに変りはない。三千の後宮はいろいろな権力と結びつき、老いた絶対者の愛情を求めようとしている。愛情といっても普通の男女の愛情とは大分異なったものになっている。権力者の寵を得るか得ないかで、自分の栄華も、自分一門一族の栄達も決定するからである。妃姫たちの玄宗を廻っての競争の烈しさは正視に耐えぬものがあるに違いなかった。楊玉環はいまその中へはいって行こうとしていた。

楊玉環の目指す離宮は都の東方六里、驪山の麓にあった。輿は滻河を渡り、灞河を渡り、ゆるやかに低い丘陵が波打っている平原をどこまでも東へ進んで行く。道は途中からずっと上りになっていて、一行は少し行っては休み、少し行っては休んだ。

やがて、輿は驪山の離宮に着いた。三重になっている城門をくぐり、池に面している宮殿の前で、楊玉環は輿から降り立った。出迎えの夥しい数の男女は直立して微動だにせず、ただ頭を垂れていた。玉環は出迎えの者たちに一顧すら与えなかった。彼等がそこに居るかどうかさえ気付

かぬように輿から降り立ったまま、視線を少し上の方に投げていた。階段状に建てられてある離宮の幾つかの建物の甍や軒庇の一部が折り重なって見え、そうしたものの背後に、丘の斜面を埋めている丈低い松柏樹の茂みが見えていた。玉環はこの時風の音を聞いた。松柏の梢にぶつかり鳴っている風の音であった。やがて、玉環は何人かの侍女に導かれて、宮殿の内部へと静かに足を運んで行った。

驪山は昔から歴代の皇帝の避寒の場所として知られていた。山の麓に温泉が噴き出していて、その湯口を取り込むようにして、離宮は建てられてあった。離宮は温泉宮と呼ばれていた。宮殿から宮殿を結ぶ長い廻廊を侍女に導かれて行く彼女の耳には、山籟の音が颯々と聞えている許りであった。

玉環は途中でちょっと足を停めた。山籟の音のほかに川瀬の音のような響きがどこからともなく聞えていた。温湯の噴き出ている音であった。浴場らしい建物を一番下にして、その上に次々に積み重ねて行くように、山の斜面に沿って幾棟もの宏麗な殿舎が造られてあった。殿舎と殿舎とを結んでいる廻廊のうちのあるものは傾斜頗る急であり、あるものは緩やかであった。

楊玉環はここの滞在中起居する部屋に導かれ、そこで短い休息をとったあとで、玄宗皇帝に謁するためにその部屋を出た。玉環はまた長い廊下を導かれて行った。玉環の前には数人の侍女が歩いて行き、その背後にも亦十人程の侍女が侍していた。楊玉環はこの頃から軽い眩暈を覚えた。廻廊を挾んで、その両側に手入れの行き届いた庭が拡がっていて、池もあり築山もあったが、その殆どのものが玉環の眼には、それがあるようにはっきりとは映っていなかった。

楊玉環は幾つかの館の前を歩いた。館の内部はどこも薄暗く、例外なくその前に石で畳んだ広い台を持っていた。石の台は寄りつくしまのないような冷たさを持ち、いかにも奥まった宮殿の内部に造られた散策場といった感じで、宮殿の外部では決して見ることのできないものであった。

玉環はとある館の前で足を停めた。前を歩いて行く侍女たちがいっせいに足を停めたので、自然に玉環もまた足を停めたのである。廻廊は少し先で直角に曲っていたが、その曲り角から、ふいにその時何人かの一団の人々が姿を現した。先に立っているのは二人の侍女であり、そのあとに数人の男が続いた。玉環は自分の前後の者たちが頭を深く垂れるのを見た。玉環は何びとが近づいて来るか判らなかったので、礼を失しない程度に軽く頭を下げていた。

玉環は、向うから来た一団が自分たちと擦れ違う時、その真中に居た一人の老人を見て、それが玄宗皇帝であることに気付いた。玉環はその人物の眼が鋭く自分を射たように思った。玉環はこの場合も極く軽く会釈するに留めた。併し、自分にとって悪魔であるか、神であるか判らぬ人物の方へ、自分でもどうすることもできない発作的な衝動で顔を上げた。自分で顔を上げようと思って上げたのではなく、ふいに顔は上ったのである。玉環は顔を上げたまま立っていた。

玄宗はちょっと足を停めて、無遠慮な見方で玉環を見た。しげしげ見るといった見方であった。そして何か物言いたげに口辺の筋肉を微かに動かしたようであったが、別段いかなる言葉も、その口からは出なかった。老人はそのまま玉環の前を通り過ぎて行ったが、玉環は暫く同じ姿勢のままでそこに立っていた。何も考えられなかった。玉環は自分の前後の女たちが依然とし

てまだ深く頭を垂れているのを見た。頭はいつまでも上らなかった。

玉環は自分が権力者に対して、いかなる特殊な態度をもとらなかったことを思った。恭しく権力者を迎えもしなかったし、礼儀深く迎えもしなかった。ただ一人の気難しそうな老人の顔を、どういうわけか、玉環も亦しげしげと見入ってしまったのである。

侍女たちは動き出した。それにつれて玉環もまた足を運んだ。そしてさっき休憩した部屋へ戻ると、そこで一人で食事をとった。豪華な料理が大きな盆に載せられて、侍女たちの手で次々に運ばれて来た。玉環は料理にはほんの僅か箸をつけただけであった。運ばれて来た料理は次々に運び去られて行き、次々にまた別の新しいのが運び込まれて来た。玉環は離宮へ足を踏み入れてから、誰とも一言も言葉は交えていなかった。すべては無言のうちに行われていた。

食事がすんで暫くすると、寝台のある部屋に導かれた。玉環はそこへ身を横たえた。都から輿に揺られて来たので、休憩せよということかと思った。実際に玉環は疲れていた。きのうからの過度の緊張と寝不足と旅の疲れが、玉環の身も心もずたずたに苛んでいた。

玉環は眠った。どれだけ眠ったか判らなかった。眼覚めた時は暮方であった。館の前に漂っている白っぽい光線と澱んでいる空気で、薄暮の迫っていることが判った。玉環の眼覚めをどこかで見張ってでもいたかのように、一人の中年の侍女が現れた。この侍女が初めて口から言葉を出して、今宵、皇帝のお召しがあるので、これからすぐ入浴なさいますようにと鄭重な言葉で伝えた。

浴室は御湯を初めとして十八あった。玉環の導かれたのは、御湯の西南隅に、低い大理石の垣

を以て、それと仕切られた妃子湯であった。

妃子湯からは御湯を全部見渡すことができた。御湯の広い浴槽は白玉石を以て畳まれてあり、浴槽の縁には魚や竜や雁などの浮彫が施され、その中央には横臥して湯を浴びることができるように白玉石製の寝台が置かれてあった。湯は同じく白玉石で造られた蓮花の花心から噴き出していた。

妃子湯は御湯の浴室に較べると大分狭くなっているが、浴槽は同じように白玉石を以て畳まれてあって、湯の出て来るところだけに紅石で造られた大きな盆が置かれてあり、どこからともなく噴き出している湯をそれが受けている。そうした湯の出口は四ヵ所あった。

湯は透明であったが、微かに硫黄の臭いを漂わせており、絶えず立ち上っている湯気が浴室の内部を熱気と、柔かく明るい霧で満たしている。楊玉環は浴槽内に体を横たえた。温泉というものにはいるのは初めてのことであった。都付近ではこの驪山と竝んで湯山（とうざん）の名が聞えているが、玉環は勿論そこへも行ったことはなかった。

温泉*　水滑らかにして凝脂を洗ふ
侍児扶け起せども嬌として力なし

白居易（はくきょい）の『長恨歌』*は、玉環が初めて驪山に於て浴を賜わった時の模様をこのように詠（うた）っている。

浴室から出た玉環は衣類を羽織ると、そのまま隣りの化粧室へ導かれた。ここには数名の侍女たちが玉環の顔に化粧するために待機していた。玉環がそこへはいって行った時、そこに居た侍

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com